

北海道新聞

Ⓢ

自立を目指して

不登校、ひきこもりの若者支援

Ⓢ

癒やしの場 学び語らう

発信 地域から

弟子屈

旅館の宴会場だった広間で12月中旬、夢を語る青年の姿があった。広間は、不登校やひきこもりの若者の自立を支援する塾の「教室」に使われている。「塾で学び、自分の命に火が付いた。つらい思いをしている人のため、塾の取り組みを広める仕事をしたい」。篠原祐翔さん(20)は仲間を前に、力強く語った。

塾は、屈斜路湖畔(釧路管内弟子屈町)の温泉旅館「屈斜路湖荘」にある。不登校やひきこもりを経験してきた15~25歳の男性7人がともに学



び、寝泊まりする。篠原さんも中学時代、人間関係に悩み、自宅でゲームに没頭し、ひきこもりを経験した。「違ふ環境に身を置きたい」と弟子屈で入塾し、現在、通信制大学でデザインを学ぶ。塾はNPO法人タルボイ・アカデミー(神戸)

が運営し、中高生や大学生が主な対象だ。同法人の「生みの親」の大越俊夫塾長(81)が中心となり、昨年10月に同旅館の一部を間借りし、神戸に続く学びやとして北海道キャンペーンを開設した。広島県出身の大越塾長と、弟子屈の出合いは31

年前にさかのぼる。大学講師だった大越さんは1975年、受験競争が激化し、社会問題化しつつあった不登校について

調べる中で「優しく感受性に豊かな子が深く傷つけている」との思いを強めた。職を辞し、不登校生を支援する「師友塾」を京都に創設。後に神戸に移転し、余暇に旅行で訪れたのが弟子屈だった。屈斜路湖の自然や住民のぬくもりに触れ、弟子屈を塾の合宿先に決めた。以来、夏冬に3週間ほどの合宿を開き、子供の癒やしの場となった。

と、弟子屈の出合いは31年前にさかのぼる。大学講師だった大越さんは1975年、受験競争が激化し、社会問題化しつつあった不登校について

のぬくもりに触れ、弟子屈を塾の合宿先に決めた。以来、夏冬に3週間ほどの合宿を開き、子供の癒やしの場となった。

小学生で不登校になった塾生の迫田学さん(20)は「以前は人前で話すことが全くできなかった。親に連れられ入塾した神戸での生活や合宿を経て、徐々に人前で話せるようになったという。」

迫田学さん(左から2人目)などと塾生らと談笑する大越俊夫塾長(右から3人目)

「鉄が炎で鍛えられるように、子供も不登校やひきこもりから多くを学んでいる」。そう語る大越塾長を慕い、弟子屈で働く塾生や移住者が出始めてきた。

自主性を尊重

塾生は、高卒資格を得るための勉強や哲学を学ぶ読書会など多彩な学習

に取組む。不登校に対する考えや理想とする生き方について、自分の考えを夜通し語り合う合宿や就労体験も行う。塾生の自主性を重んじ、日々の過ごし方を無理強いせず、「人を否定しない」のが大越塾長の理念だ。